維孝館学園クリエイト会議「第１回学校視察研修」
委員の方々が気づかれた点やご感想

教育委員会学校教育課

１１月１２日（火）に実施した池田市立ほそごう学園の視察をとおして委員の皆様が気付かれた点やご感想等をまとめました。
【参加者(14 名)：教育制度部会５名、通学部会３名、地域・広報部会２名、事務局４名】

１　施設を見学したご感想（印象に残ったこと、特徴点や工夫を感じた点、本町で生かせそうなこと）

・敷地が広い。　・スペースにゆとりがある。
・廊下幅が広く、教室を含め、全体的に光が入りやすい。
・多くの場所で高さの調整がなされていた。
・階段や手洗い場の高さ、可動式黒板、深さが変えられるプール等、９学年に対応できる施設になっていた。
・教室配置やエレベーターの位置に工夫があった。
・児童生徒数の増減にも対応できるよう各所に柔軟性を持たせた設計だと感じた。
・校舎の広さ、明るさは維中の比ではなく、今の維中の校舎をベースとするなら相当な改修が予想される。
・本町も他の部局と一緒にチームを作り、一から建築するくらいの覚悟が必要である。
・中学校があった場所に元々の校舎を残したまま増築されていて、宇治田原町も良い所は行かせると思う。
・音楽室と理科室は２～３室、中庭に小さな遊具、かべが取り払える教室等の工夫があった。
・校舎内外で９学年の児童生徒たちが集える場が散見され、子どもたちにとって楽しく有意義な居場所づくりをされていると感じた。
・お互いの授業に妨げにならないように前期・後期で校舎棟を分けていた。
・ランチルームの壁をパーテーションにして多目的に使える工夫が素晴らしい。
・校舎の設計や設備、教室の配置等に教職員の希望や意見を取り入れて作られているのが良かった。
・とても綺麗で、ここで学びたい、ここで働きたいと思う雰囲気だった。
・改築されて使われている校舎が綺麗に補習、管理されており見習いたいと感じた。
・土地が三段になっており、移動は不便だが、エレベーターが設置されたり、階段のスペースを上手く活用したりしていた。

▲広くて導線が曲がりくねり利用しにくそうであった。
▲児童生徒の動きが掌握しにくそうだった。
▲教師と児童がふれ合う場面を見かけなかった。職員室の位置が悪く（教室から遠く）、授業後、先生たちはそそくさと職員室に帰って来られていた。

２　視察校からの説明を聞いてのご感想（印象に残ったこと、特徴点や工夫を感じた点、本町で生かせそうなこと）

【開校までの準備】

・保護者や地域の方々が中心になって開校準備会が発足され、教育委員会や学校と上手く協議等をしながら制服や通学方法について検討されていた。
・ＰＴＡや地域の方による開校準備会がつくられ、保護者や地域の方も一緒に学校を創っていけたことが良かった。
・市全体として小中一貫教育に取り組み、教育委員会事務局担当が長期にわたり在籍し、小中一貫教育に取り組まれていた。
・学校運営協議会を設置し、コミュニティースクールとして運営されていた。
・学校運営協議会が本気で学校運営に取り組まれているのも成功の大きな要因であり、本町でも不可欠だと思った。
・学校・地域・ＰＴＡ相互の協力・連携と活用がうまくいっていると感じた。
・開校までの準備に相当な年数（１２年間）をかけたことや担当者が長期にわたって変わることなく担当していたことに感心した。
・制服を開校準備会の中の「お母ちゃん」達の声で決めていったことが素晴らしいと思った。「自分たちで創った学校」という気持ちが、今の地域の協力体制にもつながっているのではないかと思う。
・説明会は各団体に計１００回以上行うなど、意気込みや熱意が伝わってきた。本町は担当がころころ変わり同じところを行ったり来たりしている。
・説明会を１００回以上されたと聞き、それがあったから今、地域の方にも理解されているのかなと感じた。
・義務教育学校になるための条例、規則等の制定や改定が大変そうであった。
・開校準備の中心的な方が行政から副校長に着任され、現在も中心的な役割で活躍されていることも成功の大きな要因であると感じた。
・説明会や広報誌等を活用して疑問や意見を丁寧に聞いていることが印象的だった。

【教育課程、小中の時程、専科教育、教科担任制、学年等の枠組み等】

・開校前から児童生徒のために全学年２学級とするコンセプトを明確にされていた。
・時程については、前期課程と後期課程で開始時刻を合わされていた。
・チャイムは小中で鳴らす時刻が同じときだけ鳴らし、後は時計を見て行動している。
・発達の段階に応じて４－３－２の３段階のステージを設け、ステージ毎の取組に工夫がなされていた。
・ファーストステージ（１～４年）、セカンドステージ（５～７年）、サードステージ（８，９年）と名付けているのは分かりやすく、定着していることが分かった。
・ステージとは別に１～６年を前期課程、７～９年を後期課程としている。
・５年生の図工と体育は教科担任制にし、６年生は中学校の理科、音楽、美術、体育等の教員から指導を受けていると聞き、教科担任制への移行がスムーズにできると感じた。
・７年生の入学式はないが、１年生の入学式で１年生と７年生が手をつないで一緒に入場したり、６年生で卒業式はないが、前期課程修了式をしたり、宿泊行事を６，７，８，９年生でそれぞれ行う等、義務教育学校だからこそできることだと思った。

・どちらかというと小学校教員の負担減、中学校教員の負担増のように感じた。
・小学校教員が中学校の授業を担当するのは時間割や仕事量的に難しいと感じた。
・本町でも工夫や改善が必要だが、何よりも学校や教員の熱意とやる気があることが条件である。

▲行事は前期課程と後期課程で時程が違うので苦労するなと感じた。

【教員の協働、教員人事（異動や校内配置）、教員免許、管理職体制（学校運営）等】
・校長、副校長、教頭（２名）の体制が安定感を生み出しているように思えた。
・加配を含め、手厚い教員配置がなされていた。
・小学校教員の中にも部活動指導等を行っている教員もいる。
・職員室が前期・後期一つになっていた。事務室も同じ部屋になれば、さらによいと思う。
・職員室を校務センターと呼び、広い場所にすべての先生がいるのは良いと思った。
・職員室が大部屋で運営され、教員間の意思疎通がスムーズにされていることが重要だと思った。
・正職員以外にも多くの教員がおり、職員の数に余裕がありそうだった。
・児童生徒数約４９０名に対し、１０％強の５０名の教員と２０名の職員が配置されている。宇治田原町に当てはめると教員数は６０名。可能なのか。
・校務分掌や研究体制は９学年で一つとして運営されていた。
・ある教員に聞くと、ほそごう学園に着任した教員はほとんど異動希望を出さないとのことだった。
・教員免許については、小学校の先生が中学校の免許を持っている場合は多いが、逆はあまりいないとのことだった。
・山城地域に一貫校が少ない中、 維孝館学園で働きたい、教育したいと思われる学校になるよう、目標を高く持ってともに前進していきたい。
・説明が少なく、今一つ理解できなかった。お金の出所、校務分掌、組織の運営についてより詳しく知りたかった。

【子どもたちの様子（授業、学校行事、休み時間や放課後、部活動等）】
・バス等による放課後に時間が制限されてしまう。
・元気よく挨拶してくれ、明るく楽しく過ごしている様子だった。
・廊下ですれ違ったとき、礼儀正しく声を出してあいさつしてくれ気持ちよかった。
・全体的に明るく元気な様子であった。異ステージの交流や協調もさかんで定着した感があった。
・休み時間に私服の小学生、標準服の子、制服の中学生が廊下を自然な様子で行き交い、地域の風景が学校の中にある雰囲気がした。
・小学生は同じ学校に中学生の兄弟がいることで安心感があるように受け取れた。
・中学生は小学生の子どもたちは元気があって良いと言っていた。
・全校での学校行事、異年齢・異学年集団の取組、ランチタイムコンサート等で大きなお兄さんお姉さんが小さな子たちをいたわり、小さな子にとっては、大きなお兄さんお姉さんにあこがれを持つ気持ちが育つのではと感じた。
・部活動は後期課程のみだが、前期課程の体験、見学が可能であったり、前期課程の

教員が顧問になったりすることもある。
・５，６年生でも部活動に参加を希望している児童がいることが分かった。

▲学力・体力ともに今一つとのことであったが、その原因を家庭や地域に求めるような発言はいかがなものかと思った。
▲広さのせいか教室からの声があまり聞こえず、元気さが乏しく思った。

【地域・保護者との連携、ＰＴＡ等】
・学校運営協議会が元教育長を含む２０名で構成され、年に５回開催され、市にも意見が伝えられている、
・地域との関わりがある行事があったり高校生の出前による支援があったりする。当日は福祉施設の方から説明を受けていた。学校運営協議会の方による支援もある。
・地域やＰＴＡが積極的、組織的、協力的に関わっておられていることを感じた。学校運営協議会がポイントかと思う。
・ＰＴＡ役員が開校準備会を作り、毎年そのメンバーが残り年々地域住民や保護者の小中一貫校への期待や協力体制が強くなっていったことは学ぶべき点だと思った。
・花植えの取組、朝学習等地域の方が積極的に関わっておられる。ほそごう学園独自の取組がすばらしいと感じた。
・ＰＴＡ中心の開校準備会は、開校後のＰＴＡの密な関わりにつながっており、大切にされ、力になっているなと感じた。
・校内で学び教育室「キッズランド」を毎週水曜日に開催し、学童保育と兼ねた参加も多いと聞いた、運営方法に興味を持った。
・子どもたちの将来を地域の大人たちがしっかりと考えていてくれる地域だと感じた。
・長年の協力体制をうらやましく感じた。
・コミュニティスクールは誰がどのように仕掛けたのかを知りたかった。

【通学方法】
・スクールバスの台数（４台：中型バス２台、マイクロバス２台）や本数の多さに驚いた。
・下校時刻を微妙に調整したり、変更したりするにはスクールバスの方が臨機応変に対応しやすいと感じた。
・小学生の登校班はない。徒歩の児童は一番遠い子供で１５分位かかる。（１㎞程度）
・登校班はなく、子どもたちは自分で通学にかかる時間を考えて登校してくることが新鮮に感じた。
・バスは４台が２～３周ピストンしていて３周目は遅刻者を拾うバスになっている。
・中学生は徒歩、自転車が中心だが遠距離の生徒は大きなバス停からスクールバスの乗降をする。（バス停まで自転車に乗ってきてもよい）
・バスの運行は業者に委託している。
・特認校のため、区域外児童生徒は公共交通機関使用の条件で受け入れている。
・ほそごう学園は通学にかなりの予算を計上していると感じた。本町の通学についても納得いく方法を考え、説明していく重たい責任を感じた。
・行政がバス費用をしっかり負担しないと厳しいと感じた。

▲スクールバスの運行について、行政の理解と協力、財政面のバックアップがしっかりとしている。本庁においては庁舎建設も有り不安もある。
▲登校班がないので遅刻や安全面はどうなのかと思った。

３　その他、視察に行って気づかれた点

・１～４年生は私服、５．６年生は標準服で、７～９年生は制服であった。
・特認校制度を採用している。
・「中学生が優しい」ということを繰り返し説明されていた。
・多くの件で１年から９年の全体を視野に入れて考え、取組に反映されていた。
・本町でも十分にできる（既にしている）内容だと感じた。
・先進地と本町で行政間、教育委員会事務局間でハード面や人事の進め方等について懇談をすれば良いと感じた。
・市単費の教員を付け少人数学級にしている学年があった。
・開校前の不安（子どもたちのいじめやけが等の安全面、部活動と放課後の小学生の遊びの重複）は開校後はなくなり、中学生は優しく、休み時間も時には一緒に遊ぶなど問題は起きていない。部活動もバス下校のため時間帯が重ならない。
・ほそごう学園の先生は大変な努力をされたと思うが、自信を持っておられると感じた。
・同じものとはいかないが、基本理念は学ぶところが多いと感じた。本町でも全住民が未来に希望を持てる学校にしていきたいと感じた。
・（通学部会として）通学方法だけでなく、見守りや地域の意識向上をどう図って行くか考え、行政や民政児童委員、また、工業団地組合等の企業担当者等も含めた会議が開催できないか提案してみたいと思った。
・ホームページが毎日更新されていることや、教職員の配置や協力体制、専科教育等の面でマンパワーがあり、学校の雰囲気が生き生きと明るいと感じた。
・５０名の教職員と３０名近い嘱託職員、非常勤教員等、人数の多さに驚いた。
・維孝館学園の地域力活用について、現行の１中２小学校での協力体制を壊すことなく、現行にプラスアルファできる「地域学校協働活動」の骨組みを一貫校に向け同時進行で築いていってほしい。
・「教育日本一のまち」を目指されていることもあり、施設も人員配置も手厚いように感じた。
・長期休業期間を利用して、全教職員で視察に行くべきだと思った。

▲何のために義務教育学校にされたのか分かりにくかった。本町においてはしっかりとした説明が必要である。
▲デメリットの面などもう少し突っ込んだ話も聞きたかった。